

# 与党支持率・内閣支持率と衆議院議席率

石間英雄・白糸裕輝

January 21, 2026

衆議院が解散されるそうです。そうなるとよく話題になるのが、「内閣支持率が高いから勝てると思って解散する」とか、「いやいや、与党支持率はそんなに高くないので、思惑通りにはいかないだろう」とかいう議論です。たとえばこれ <https://www.ktv.jp/news/feature/260114-hashimoto2/> とかこれ <https://www.jiji.com/jc/v8?id=20260119kaisetsuiin197> とか。

しかし、実際に与党や内閣の支持率は、衆議院選挙での与党の議席率とどのような関係があるのでしょうか。選挙の予測（特に小選挙区の結果の予測）をするには、各選挙区についてミクロに分析するのが通常のやり方であることを考えると、先のような言説はちょっと不思議な感じがします。もうちょっと厳密に言い換えると、マクロ的な指標である与党支持率・内閣支持率が、マクロ的な選挙結果である与党の議席率を予測するのに役に立つのでしょうか。この点についての過去のデータを使った分析が思い当たらなかったので、筆者らは自分でやってみることにしました。特に学術的な価値はないでしょうが、楽しんでいただけだと嬉しいです。

1998 から 2019 年までの支持率データは、NHK 放送文化研究所のサイトより取得。<https://www.nhk.or.jp/bunken/yonon/political/>

2020 年から 2025 年 12 月までの支持率データは、NHK 選挙 WEB から取得。<https://news.web.nhk/senkyo/shijiritsu/>

与党の議席率は、wikipedia の各回の衆議院議員総選挙のページから取得。

なお筆者の一人（白糸）が base R 原理主義者であるため、ggplot2 などの tidyverse 系パッケージは使用していません。ご了承ください。

## 散布図

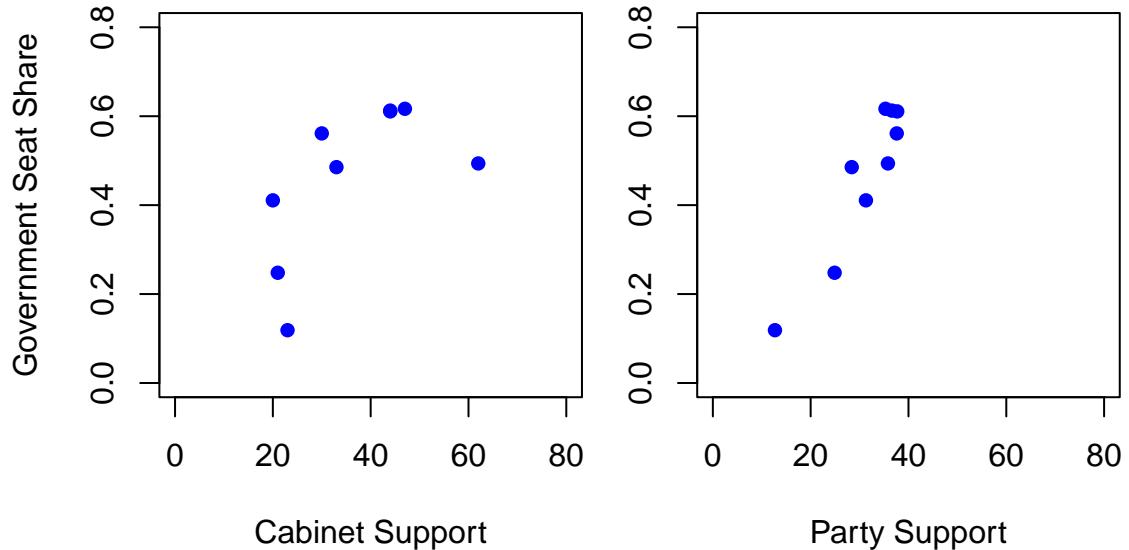
とりあえず、与党支持率・内閣支持率と衆議院議席率の散布図を描いてみましょう。

```
par(mfrow=c(1,2), mar = c(4, 4, 1, 0))
plot(dat$cabinet_support, dat$seat_share_government,
      xlab="Cabinet Support", ylab="Government Seat Share",
      xlim = c(0, 80),
      ylim = c(0, .8),
```

```

    pch=16, col="blue")
par(mar = c(4, 3, 1, 1))
plot(dat$gov_party_support, dat$seat_share_government,
     xlab="Party Support",
     xlim = c(0, 80),
     ylim = c(0, .8),
     pch=16, col="blue")

```



確かにどちらの支持率も、なんとなく与党の議席率と関係がありそうに見えます。

## 回帰分析

とりあえずそれぞれに線型単回帰をかけてみます。

```

par(mfrow=c(1,2), mar = c(4, 4, 1, 0))
fit.lm.cab <- lm(seat_share_government ~ cabinet_support
                  , data=dat)
plot(dat$cabinet_support, dat$seat_share_government,
     xlab="Cabinet Support", ylab="Government Seat Share",
     xlim = c(0, 80),
     ylim = c(0, .8),
     pch=16, col="blue")
abline(fit.lm.cab, col="red")

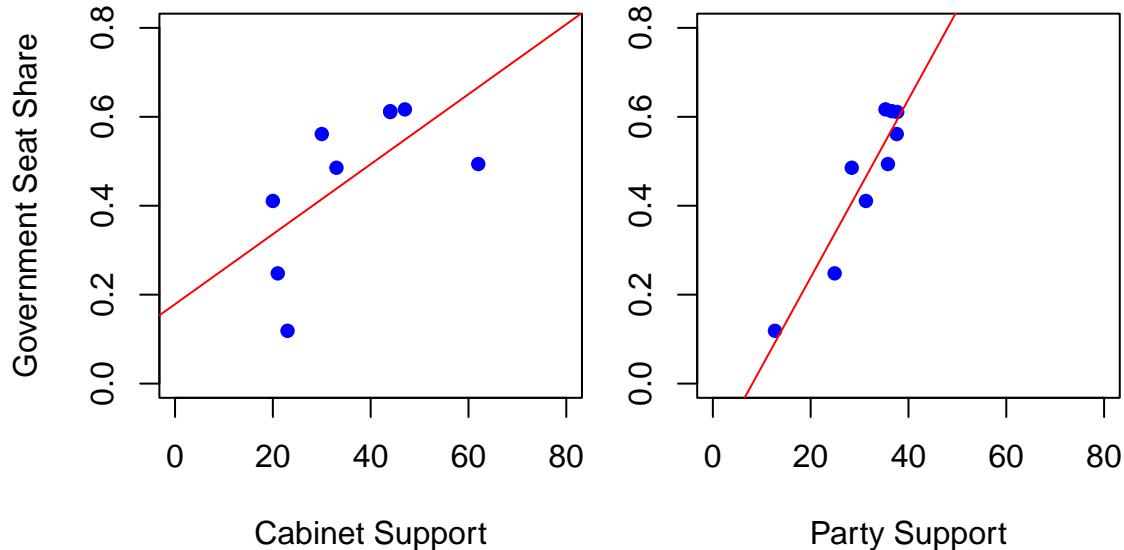
fit.lm.party <- lm(seat_share_government ~
                     gov_party_support
                     , data=dat)
par(mar = c(4, 3, 1, 1))

```

```

plot(dat$gov_party_support, dat$seat_share_government,
      xlab="Party Support",
      xlim = c(0, 80),
      ylim = c(0, .8),
      pch=16, col="blue")
abline(fit.lm.party, col="red")

```



なんとなく見えたとおり、それぞれの回帰直線は正の傾きをしています。つまり、内閣支持率が高いほど、与党支持率が高いほど、与党の議席率も高くなる傾向がある、ということです。

では次に、両方の支持率を説明変数に入れた重回帰分析をやってみましょう。

```

fit.lm <- lm(seat_share_government ~ cabinet_support
              + gov_party_support
              , data=dat)
summary(fit.lm)

##
## Call:
## lm(formula = seat_share_government ~ cabinet_support + gov_party_support,
##     data = dat)
##
## Residuals:
##    Min      1Q   Median      3Q     Max 
## -0.09145 -0.03150  0.01574  0.03804  0.07862 
## 
## Coefficients:
##             Estimate Std. Error t value Pr(>|t|)    
## (Intercept) -0.167144   0.093687  -1.784  0.12467  
## cabinet_support  0.000322   0.000125   2.576  0.02187 ** 
## gov_party_support 0.000322   0.000125   2.576  0.02187 ** 
##   
```

```

## cabinet_support     0.001414    0.002105    0.672   0.52659
## gov_party_support  0.018566    0.003645    5.093   0.00224 ** 
## ---
## Signif. codes:  0 '***' 0.001 '**' 0.01 '*' 0.05 '.' 0.1 ' ' 1
##
## Residual standard error: 0.06763 on 6 degrees of freedom
## Multiple R-squared:  0.8886, Adjusted R-squared:  0.8515
## F-statistic: 23.94 on 2 and 6 DF,  p-value: 0.001381

```

結果を見ると、両方の支持率とともに正の係数になっていますが、政党支持率の方が大きい値になっており、かつ有意水準 1% で有意になっています。他方、内閣支持率の方は係数の絶対値が小さく、また有意でもありません。

ちなみに、この回帰モデルを使って、2026 年 1 月時点での内閣支持率 62%、与党支持率 32.2% の場合の与党議席率を予測すると、以下のようになります。

```

predict(fit.lm, newdata=data.frame(cabinet_support = 62
                                     , gov_party_support = 32.2)
        , interval="prediction")

```

```

##          fit      lwr      upr
## 1 0.5183633 0.3017346 0.734992

```

予測値は自民党が過半数を若干上回る程度ですが、予測区間が非常に広いことに注意してください。30% から 73% までの幅があります。これだけの幅があれば、どんな選挙でも予測を外すことはないそうです。

## 残差分析

重回帰分析を視覚化するために、残差分析をやってみましょう。よく知られているように、重回帰分析の係数は、目的変数を他の説明変数に回帰した残差を、関心のある説明変数を他の説明変数に回帰した残差に回帰したときの回帰係数と等しくなります。例えばここでは、与党議席率と内閣支持率を与党支持率に回帰し、その残差同士の関係をプロットすると、重回帰分析の内閣支持率の係数と同じ傾きの直線が得られます。

```

fit.cab.party <- lm(cabinet_support ~ gov_party_support, data=dat)

fit.party.cab <- lm(gov_party_support ~ cabinet_support, data=dat)

par(mfrow = c(1, 2), mar = c(4, 4, 1, 1))
plot(y = residuals(fit.lm.party), x = residuals(fit.cab.party),
     xlab="Residuals from Cabinet on Party",
     ylab="Residuals from Seat on Party",

```

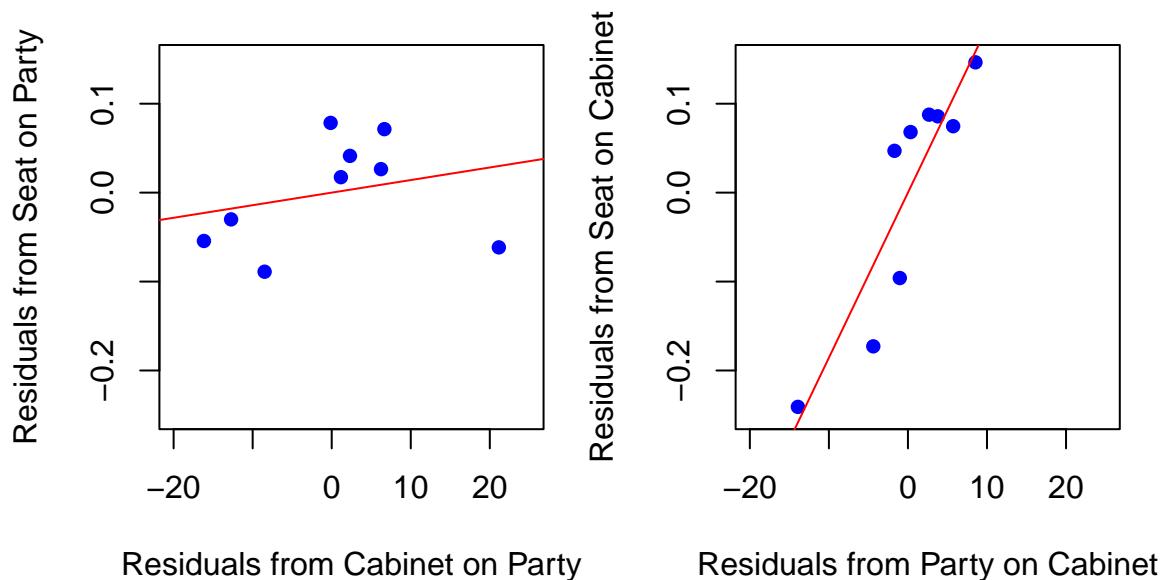
```

ylim = c(-.25, .15), xlim = c(-20, 25),
pch=16, col="blue")

abline(b = coef(fit.lm)[2], a = 0, col="red" )
par( mar = c(4, 4, 1, 1))
plot(y = residuals(fit.lm.cab), x = residuals(fit.party.cab),
      xlab="Residuals from Party on Cabinet",
      ylab="Residuals from Seat on Cabinet",
      ylim = c(-.25, .15), xlim = c(-20, 25),
      pch=16, col="blue")

abline(b = coef(fit.lm)[3], a = 0, col="red" )

```



内閣支持率と与党支持率のそれぞれに関してこの分析をやってみたのが上の図です。重回帰分析の係数の結果がより視覚的に理解できるでしょう。左の図は内閣支持率に関するもので、傾きが小さいことがわかります。他方、右の図は与党支持率に関するもので、傾きが大きいことがわかります。

## 結論

一応の結論としては、与党支持率・内閣支持率の両方が高いほど与党の議席率も高くなる傾向があるものの、与党支持率の方がより強い関係にある、ということになります。特に、与党支持率を考慮した後では、内閣支持率は与党議席率を予測する上ではあまり役に立っていません（少なくとも2000年以降のデータに基づく限りでは）。予測値だけで考えると、内閣支持率の高さを頼んで解散を決めるのはあまり合理的ではないように思えます。むしろ与党支持率が上がっているときに解散する方が、まだしも合理性を見出すことができます。

ただし、この予測には非常に高い不確実性があり、特に議席率を正確に予測できるとは限りません。内閣支持率・与党支持率と選挙結果の関係をあまり過信しない方が良さそうです。